583
583-38
1200501523256

帝國圖書館藏

富坂賢太郎著

歌集

うたかた

あけび叢書第八篇

帝國圖書館藏

富坂賢太郎著

歌集

うたかた

あけび叢書第八篇

昭和十二年十二月二日 帝國圖書館

583-38

序

明治四十二年の秋、東京では「アカネ」から「阿羅々木」が分離して、やがて對立の狀を呈した時、私共關西にありて同じく根岸派に屬してゐた者どもは、翌年の一月から、別に關西同人根岸短歌會なるものを興し、毎月一回會合作歌し、其の詠草は之を大阪朝日新聞紙上に掲載することゝした。然るに當時この會の同人は、攝河泉及び山城等に散在して、會合は毎月場所を變へたのだけれども、集る者は常に多からず、そこで神戸在住の私共同人數名は、相集ることの容易さから、同年十月、別に神戸小集を催ほしたが、之が濫觴となつて、此の會合は其後武庫短歌會の名の下に毎月開かるゝことゝな

り、或は近郊に遊歩吟咏を試みたりなどしつゝ、大正四年一月には、遂に雜誌「潮騷」（後に「しほさゐ」）を創刊するの運となつた。これやがて我が「あけび」の前身であつて、從つて武庫短歌會は我が「あけび」及び「あけび」會員の母胎なのである。

この武庫短歌會は、もともと神戸に於ける少數同人の會合として起つたので、別に會員募集等のことをせず、新來者に對しては、來る者は拒まず、去る者は追はずの態度を持して居たが、それでも久しい年月の間には、おのづから幾多の眞摯堅實なる同志同人を得たのである。だが、それ等の中にあつて、夙に私共をして將來を囑目せしめ、而も終始一貫、渝ることなき誠實と熱意とを以て今日に至つて居る人々を擧ぐれば、何としても此の歌集「うたかた」の著者富坂賢太郎君に先づ指を屈せざるを得ない。富坂君こそは實に私共の會の微々として而も其の歩みの尙遲々たりし頃より、私共と斯の道を共にせられて正に二十有餘年、堅忍と誠實とを以て一貫して今日に至られた篤實なる求道者であり、實踐家なのである。その富坂君が、今日に至つて始めて其の歌集を出版せらるゝのは、實は寧ろ晩きに失するの憾はあるが、併し其の特異の境地、洗錬された表現の手法に於て、必ずや歌壇の一隅に尊き或るものを寄與し、歌壇の注目を惹かるゝであらうことを信じて疑はない。

どうして富坂君が我が武庫短歌會に心を寄せらるゝに至つたかに就ては、或は富坂君自身が別に述べられるかも知れないけれども、聞く所によれば、明治四十四年の九月、武庫短歌會例會を、明石公會堂に開かんとして、會場

差支あり、俄に人丸神社に會場を變更した時、その歌會の記事が大阪朝日新聞神戸附錄に掲載されたのであるが、その記事中に「新らしき木の香匂はむ明石なる公會堂はあが行くところ」の歌あり、それがどういふものか富坂君の心を捉へて忘られなかつたといふ事である。これより後、富坂君は私共の歌會に其の作歌を送られるやうになつたと記憶するが、當時富坂君は神戸の或る湯屋に勤めて居られて、なか〳〵歌會などに出席される餘暇はなく、投稿される歌ですら、夜半を過ぎて午前一時又は二時頃詠むのだと聞かされた時に、私は同君の歌に比し私自身の歌がまだ〳〵如何に浮いてをり遊んでゐるかを、ひそかに耻かしく思はざるを得なかつたのである。この富坂君が私共の歌會に何時頃から出席されるやうになつたかは、私には正確なる記憶はない。それは恐らくそれから可なり後のことであらうと思ふが、縱しそれが後れたとしても、私共は既に君の歌によつて君を知つて居た。君の歌はその頃から既に特色があり、それは何れかと言へば主情的であつて、殊に身邊の雜事を詠んだものに傑れたものが多かつたが、それ等の歌にはおのづから一脈の眞實味――それは體驗者でなければ現はせないところの一脈の眞實味――の、惻々として人に迫るものがあつた。私共が君に注目し囑望したのも實に此の點であつたが、君の此の特質は、其の後益々磨かれて殆んど圓熟の境に入り、而も其の表現には盤上玉を轉がすやうな格調の滑らかさと快さと又おのづからなる含蓄の妙味があつて、深く人の肺腑に觸れるのである。斯の如きは恐らく君の獨壇場であつて、容易に他の追隨を許さない所のものであ

らう。今回君がそれ等の歌を輯めて此の一卷となし、之を世に公にせらるゝのは、單に私共だけの喜悅でない。どうか今後とも、君の傑れた素質と、傑れた表現の手法によりて、ます〳〵この世相と人生の奥處を詠みつぎ、詠み現はされ行き、それ等はやがて君の第二第三の歌集となつて世に現はるゝに至らむことを。

昭和十年八月十六日

和歌山の寓居にて

花田比露思

目次

大正六年…(六十五首)……一
大正七年…(百〇七首)……一六
大正八年…(百〇七首)……三九
大正九年…(十二首)……六一
大正十年…(二十三首)……六四
大正十一年…(二十四首)……六九
大正十二年…(二十七首)……七六
大正十三年…(十四首)……八四

大正十四年…(六　首)……八八
大正十五年…(二十四首)……九〇
昭和二年…(五十二首)……九七
昭和三年…(五十一首)……一一〇
昭和四年…(五十一首)……一二三
昭和五年…(五十二首)……一三六
昭和六年…(百〇一首)……一五〇
昭和七年…(七十七首)……一七五
昭和八年…(百五十六首)……一九四
昭和九年…(百四十八首)……二二七

うたかた

大正六年

冬

巷路は薄日てりつゝ陰りつゝ摩耶が嶺呂には雪ふれるかも

摩耶が嶺に天の白雪ふりおけば別れて遠き人の戀しき

母の三回忌

面影に見えつつもとな室咲きの菜種の花は灯に浮けるかも

今生に術もすべなし在りの世に一日を安くおき參らせず

夢

思ひねの夢とはいへど黑髪の匂ひかなしきをとめなりけり

現にはあはれ再び逢へばとてすべなきものを夢のかなしさ

戸を繰ればあかとき空に月あはし切なき心誰知るべしや

風邪

さ夜ふけの眞水つめたく風邪藥アンチピリンを服みにけるかも

床内に身は靜やかに浮く如し熱かも出でし外の面雨ふる

外の面にはさび〳〵春の雨ふれり心もうとくきゝにけるかも

寢返へれば稻妻なしてわく思ひうつゝ心に悲しくてならぬ

春

世の春をあはれ泣きたく噬ひたく夕べ貧しく酒のみにけり

流るゝ闇

さ夜ふかみ心昂ぶり外に出でゝ闇の奥所に瞳をやりにけり

ふかぐと闇は流るれ生きの身の息をひそめて吾はなげくも

この夜らを遠き筑紫に母ならぬ人と相寢て子は泣くらむぞ

微恙

ひとり者うすら病みつゝわび寢ねば淺夜の夢もはかなかりけり

遠天に縊れ死なばと晝の月見つゝわが眼はぬれてけるかも

摩耶山中

朝雲のいゆきはゞかる峽の空鳶はまひつゝ峯を越しにけり

久なればあなやといひて草深野こもろふ百合に手ふりかねつも

醜女の戀

無花果の實のつぶら實に夏たけて醜女の戀に逢ひにけるかも

夏ふかみ花咲かぬ木の青の實と醜女の戀といづれかなしき

うとましきことの起りて

憤りなげき思へば身の末のおぼつかなさに泣かれぬるかな

何とせむ鳴るは生田の古寺の明けの鐘かもいねがてにきく

古里の妹に

秋空の澄みの極みに瞳をあげてものなうれひそ人妻汝は

汝が夫はいまだ逢はねどをり〳〵の消息を見つゝ吾戀ひにけり

古里の江笠の山に秋されば立つや朝ぎりわくや夕ぎり

初秋

糊つけし夜の衾のかたければ憶良を思ふこゝろわきたり

なげきつゝをぞや醜女におもはれて秋に入るもよこの錆心

秋の蝶秋の青葉にやすらはずあわたゞしくも飛びめぐるかな

秋の蝶彩羽(あやは)ぬらしつとびゆくや甍は光る朝の日照(そば)へ雨に

四隣音なき夜半、古里の父を思ふ心切なり

父上よ弱きからだは秋風にわきて夜風にこゝろし給へ

秋の夜は背戸の矢川の瀬をはやみ早くないねそ夜半に目ざめむ

背戸川の矢川の瀬音いねざめの父が枕にひゞきかよはむ

いねざめは煙草をにがく吸ひ飽きて遠地の子らを思ひ給はむ

必ず吾を信じ給へと父を思ふ心昂ればひとりごちつゝ

吾は就寝午前二時をすぐ

秋の夜はながしといへど働けばながくもあらず短くもまた

長からず短からねど秋の夜は疲れてひとり寝るよ小床に

秋

秋なれや朝の厨に陶物のわれてくだくる音のさやけさ

あやふくもけはしきことを言はむとし出づる外の面の秋の夕風

甲斐なくも人に使はれ住みわぶるわが世の秋の風はさむけし

こころ妻

けだしくも夜床になびく黒髪は冷めたからむぞ秋の人妻

はふ蔦の別れて秋は五つめぐりめぐりは來つゝわがひとりなり

秋の壁つめたきものをこゝろ妻ものを言はねば吾がよりにけり

秋山

秋山のあらしのあとの朝露にあはれさやかになく虫のこゑ

秋草の花をやさしみ手折りつゝやがては捨てむはかな心に

眼路のはて山かと見ゆる雲の色心かなしくならんとするも

誘惑

わが腕(かひな)おかばおくべき細り肩あはれ消ぬがにもの言はぬ子よ
夜の蔭にいのち二つがあやふくも觸れなむとして悲しよ今は
ほだされてあはれと言はゞたまゆらの後はかへらぬ悔となるべし

病床

働かねばならぬこの身が三日五日病みて臥れば憤ほろしき

病みこやりつくゞ居つゝ夕されば泣きたくなりて泣きにけるかも
昨日より今日はやゝ快(よ)しともしくも明日はいさゝか飯はみてみむ
かりそめの病といへどこゝろ細り思ふは人の生死(いきしに)のこと
さ夜ふかく蜜柑の汁を吸ふ心このあはれさは人知らざらむ
枕邊によみたき書はつみ重ね讀むとしなくに埃おきたり
かゝる時ひそかに來りわが額(ぬか)に手をおきたりし人は遠しも

近火

さ夜ふかくあかとき闇に煙のむたくれなゐの火ぞ空に立ちたれ

ひきしまり身におぼへつゝほどこさむすべを知らねば吾が立ち見つゝ

次の家に火は移りたり今は今また向つ家に火はとびにたり

さつとばかり電柱に火は走りたれあな眞赤なりその火の柱

ぬば玉の夜空も燒くと燃えにもゆあな焦熱の炎の世界

年の暮に

生けるしるしありやなしやはかもかくも數日に盡くるわが二十七

おぼろかに思ひ過ぎ來しならねどもかへりみすれば悔心いたし

かにかくとたよりたよられ空しくは過ぎ來しものを父も老いたり

現し世に吾をたのめつゝ待たざりし母が齡を思へばなげかゆ

大正七年

年酒

悲しみはなしといはねど新年の今朝の心は明るかりけり

醉ふべくし呷るが常の酒ながら心もゆたに今朝は醉ひたり

夜のほどろ外にはうす雪ふるといふあなおもしろと醉ひてわが言ふ

新年の今朝は醉ひたり忘らえぬ大事はあれどさもあらばあれ

雪の夜

ふる雪のさ夜をひそかにそこはかと思へば吾も罪を犯せり

ふる雪は消なば消ぬべし過ちて人に知らえぬ歎きぞ吾がする

更けなやむさ夜をふりつむ雪明り泣くに泣かれぬ疲れ心よ

大阪の弟、久しく病みて此頃病進むといふに
急ぎ訪ぬれば、今朝出しまゝ歸らずといふ。

今々と待ちてあれどもすべなさに呑むはかなしき酒にぞありける

弟はどこにどうしてゐるならむ呑めども醉はぬこの酒の味

醉ひがてに冷えて空しき盃よまつに在所は知るよしもなく

この室に病みてこやればかなしけむ曇り日といへど暗きことかな

病むときゝ心も空に來しものを來て待つものを早かり來ね

病む心人目を怖れ野へ行きし海へや行きし早かへり來ね

夕近み雪さへふるを外にあらば風寒むからむ早かへり來ね

時ありて神戸の兄に逢ひたしといへりしといふ兄ぞ吾が待つ

歸省

あしびきの雪の山路をこえなづみかへりゆくとも母はあらなくに

向ふには雪のふるらし雪山の尾の上さだかに見えわかぬかも

丹波の山但馬の山も一やうに雪をかつぎて靜もるあはれ

たゝなはる山又山の白雪の世界にこゝろ消えなむとする

雪山のその高山のおごそかさ遠きに見つゝおどろく吾は

夕やみの風にながれてさむぐし向山裾をめぐる瀬のをと

戸を鎖さばやゝに遠ぞく背戸川のたぎちのとよみきゝて眠るも

額あげて今朝はわが見る鄕路山雪かゞやかに朝日子に照る

朝日子に尾の上の雪はてりはえて紅うすくかゞやけるかも

鄕路山尾の上の松のたゝずまひ幼ごゝろに見るべかりけり

大伯母の墓

み墓べは木原笹原をり〳〵に雪のしづれてひそかなるかも

いつの日に誰が手向けし閼伽の水枯笹の葉と氷りてゐるも

兄

兄上に髯刈りそけて貰ふなり日向まぶしく目をとぢゐるも

兄とわが出で入る息の觸りたればよみがへり來る幼心か

肉親の言はむすべなき親しさをおぞやいく年わが忘れゐし

剃刀の觸りの快ろしさほのぐと思ふは遠きかみの日のこと

いさかへば兄に批をうつ母なりしわれを叱るは父に在しき

出郷

彌生立つ今朝をほどろにみ雪ふり蕎麥を食うべて寒きこの朝

ものゝ影くろぐとして古里をわがたつ今朝の有明の月

ふる里にとゞまりかぬるさぶしさは人に知らゆな有明の月

逃亡の子

一葉のはがきが告ぐる別れかも後あはむ日は知るよしもなく

停車場のとよみの中に書きたらむしどろもどろの字の亂れはも

常安の國をもとめて草枕旅ゆくかもよゆくへ知らえず

汽車の窓ゆ泪にくもる目にや見む送りむかふるいく山河を

汽車内にさ夜ふけぬれば肱枕ゆれゆる夢もやすからざらむ

まがなしき命生きむとありかねて天ゆく雲のゆくへ知らずも

國遠く行き行けばとて汝が心生きの限りはさぶしかるべし

つかれ

村肝のこゝろのつかれ身のつかれかなしかれども人に知らえず

常の如今は酒さへ甘からずほと〳〵今はつかれけらしも

米騒動

久方の夜空の雲にもゆる火をあなやといひて見れば悲しも

燃えにもえ炎の立ち秀なびかねば涙ながるゝまで見つゝゐし

市人も心ゆらぎにありかねて何かの罵りつゝ行きかふものか
聲あげて暴徒の群のなだれゆく街路にひくき夜のくもり空
をり〳〵は額うつ雨のある程のくもり夜ながら朝づきにけり
今は早明けづきぬらし一ときを寢なといひつゝぬるとしなくに
市人も今はほと〳〵つかれけむ暴動の夜は明けむとするも

夜警

しめらへる地にさ夜ふけ瀧道に歩哨となりてわが立ちつくす
なりはひに晝はつかれし村肝の心するどく夜を立ちつくす
あかときはいまだをぐらし目に近く朝顔の花咲かむとするも
あかときはいまだをぐらし僚友の吸へる煙草がほつゝり赤く
巡警は木銃擔ひ來りけり眠くやあらむと言ひにけるかも

凌宵花　布引山

思ひきやこゝの山邊の松が枝に凌宵花咲きてゆらげる

枝高みさぶしき松にからまりて眞赤く咲ける凌宵花（のうぜんかづら）

赤ければ凌宵花あはれなり松のみどりの葉がくりに咲き

見てあればいよ〳〵赤くあやふけれ上枝にゆらぐのんぜんかづら

ゆらぎつゝ花の散りなば布引のたぎつ瀬にかもおちて流れむ

秋　來　る

無花果も今は食すべく熟れたれば甦り來るわがかなしみは

貧しければえらばぬ妻もあらなくに秋はわが身にまためぐり來し

こほろぎがなけば大悲の親心つばらに思へて夜をいねがたし

送　征　途

踏切に今かも來ると兵隊の汽車をまちつゝこの人だかり

言はむすべせむすべ知らに極りてこの群衆のばんざいの聲

日本のいのちは凝りて天地のゆらぐとばかりばんざいの聲

兵隊も旗を双手にうち振るよわれらが目にも涙うかぶよ

現し身の命死にするたゝかひにわがますら男はまさけくてかへれ

竹の里人忌　西の宮花田先生宅

病み呆けて在せる寫眞ながめつゝすぎにし人を偲びけるかも

長月の望の月夜をよりつどひ梨をたうべて偲びけるかも

月夜の霧

きらひつゝ月は眞空にまんまろし吾があたりべをなく虫のこゑ

灯が一つさ霧の奥にはろばろし津の國原の秋の月夜を

しつとりとさ霧にぬれてゆく長路人には逢はずあはれ月夜を

稲原の沈霧ふかく夜の汽車音はとゞろかにかげの如ゆく

時雨の夜

神無月時雨ふる夜をまれなれや机を撫でゝゐつゝたのしも
わが室の壁にかゝれる幼子の寫眞を見つゝこゝろは和ぎぬ
はなぐはし壁の寫眞はおさな子の立つや這へるや靜子慶行
幼子の寫眞に向ひいつしらにもの言ひたればさぶしさのわく
何やらむあきらめはてし心やすさ時雨をきゝて眠らむとすも

おふみ

咲く花の咲きのさかりは長からず早姙るといひにけらずや
久に見てあまたは言はずほのかだに觸りてはならぬ心あやしく
言に出でゝ言はぬあはれはをみな子のひそかに結ぶその五月帶
細り肩乳房のあたり姙らばかなしからむとわが思ひみし
うなかぶしはこぶや針の手はたゆく吐息もらして人に知らゆな

さぶしさは淺夜の町をより添ひて行けりし程のわが心かな

夕　渚

さゞなみの光る月夜の夕なぎさ人を忘れずわれのさぶしさ

よる波のゆたにたゆたに泊り舟入江に赤く灯をともしたり

逢ふべくし逢はぬ恨みにこの夜らをいくたり人のふりなげくらむ

なげきつゝ月夜渚をさまよへば地にひく影もうらぶれて見ゆ

挽　歌　おふみを哭す

子の母となる日を近み熟やみて七日七夜に去にし君はや

けだしくも白く冷く美しき死相ならむとなみだこぼるゝ

ながからぬ一生の命極まりていまはの唇に何を言ひけむ

ひそか言ひそかにきゝし宵心今はしく〳〵戀しきものを

ほのかなる憂ひをもちて相見つゝあやまたざりし心かなしも

弟の入營　姫路騎兵隊

おぼろかに思ひすぐしそはく大刀のつかの間もかりそめならず

兵隊のにほひの中に眼をとぢて今宵は何を思へるならむ

兄の嬰兒死す

赤埴の土を堀りつゝつくぐと子は死にたりと思ひつらむか

かたはらに眠り給ふは祖母ぞと落葉の墓になみだちりけむ

父病み給ふ

はやり風いたもはやりてわが父の臥やすときけば安き空なし

古里に吾を待たせる老いらくの父をわするゝ日はなきものを

霜夜空子故になげく親もあれやわれは親ゆゑたちなげくもよ

なりはひにいとまはなけれ子なればぞ飯食(いひを)すまひも父をこそおもへ

父が命さやりあらすな時じくの果物のおくる召し給へこそ

奈良漬を好み給へば

病やゝよしときく日のうれしさにおくりまゐらす瓜の奈良漬

奈良漬の味をよろしみ朝夕の飯しすゝまば癒えの早けむ

弱けれど父よなが生きし給へや盃とりて今宵よろこぶ

大正八年

歸省

小阪峠

松風の峠の上を杖ひきて愚庵和尚か今行かす見ゆ

かたむけて在すあじろの笠うちて松葉が散らむ松の下かげ
この山の池面にうつる天雲の行方も知らぬ人はこひしき

古里にやむ

ふる里の十日あまりの起き臥しにやまひ得たればわが身いとしも
晝と夜のけじめもあらず臥りつゝわが身の末をおもひかねつも
このまゝに死にもはてよと誰が言ひしわれにかへれば盜汗しとゞに

病みこやりふる雪の夜を目ざめゐつうつしけなくに泪こぼるゝ
ひきかつぐ麻手小衾おろかなる泪にぬれて人にしらゆな
さ夜くだち雪つもるらし背戸川のたぎちのとよみひそまりにけり
宵さむみあかときかけて尺あまり地につみつゝふれる雪かも

寂寥

うれしさはこの寂寥ぞ雪山の尾の上に來つゝ焚く藁火かも

雪玉を松の秀枝に投げて見し松もさぶしくものを言はねば

生々しくこゝに伐られて横たはる松の木なればあはれとぞ思ふ

年古りし尾の上の松はおのづから枯るゝは悲し伐らるゝは尙

五百重山雪をかつぎて靜もれりおもひ出づれば人は遠けれ

待つといはゞ眼路の限りにたゝなはる雪の八重山越えてゆかむに

あきらめて吾にかへればうつそ身の手足つめたく心はかなしや

聲あげて泣かまほしけれ雪ふかき杉の木原の傾斜に今は

弟を騎兵隊に訪ふ

山裾の馬糧倉庫は目にまぶし廣峯おろしさむきあしたを

面會所のつめたき卓に相よりてわがますら男を愛しみ目守る

色あせしカーキー服のますら男はつばらに見れば幼なかりしも

新兵のまして騎兵の朝夕はつめたしといふきくがあはれさ

若草

今生にまたあるまじきことゝいふ今宵はかなき思ひは湧くも
何やらむ今宵限りと去にしがのうつろ心に妻まくわれは
目さむればあはれなるかも見も知らぬ昨日の他人今日のわが妻
かもかくもわが貧しさを知りつゝもとつぎてぞ來し子を愛さしめ
若草の妻まきしよと告げやらむすべなき母を今朝おもひ出づ

なげき

男には男の苦勞あるものをあなわづらはしわが妻の無智
夕まけて燃えひろごれる山の火になげく心は誰しるらむや
今日の日も終りとなりし疲れかも鏡にうつるわが浮かぬ顏
常ならばたのしからむをおぼゝしくさ夜をつかれて妻にかへるなり
あはれとは時には思へかにかくとゆゝしきことにおもひいたるも

酒のみてかへり來し夜は慰もる妻ならなくにやゝあはれなり

目覺むれば鷄は鳴きつゝ夜はふかし妻が寢息にふりてうとまし

幸を妻にも知らぬ身にわびし夕日に驕る八重さくら花

やはらぎの春の彌生を妻まきて人に知らえぬなげきぞわがする

病殆どよく今日は濱へあそびにゆきしなどいひこしたる子に

眞乙女の憂ひは知らねよる波の竹野の濱にものな思ひそ

次ぎの日に書かむたよりは病今全くよろしと告げこよとこそ

白々と山にこぶしの花咲かむ日までに癒えてすこやかにをれ

蛤を貰ふ

二合半(こなから)の酒に醉ひたり春の夜を燒蛤の香をなつかしみ

潮干潟君が玉手に拾ひけむこの蛤はうまかりしかな

何やらむたのしく醉ひぬかゝる夜は獨りを寢なと妻にかへらず

挿して見るうこん櫻の咲きたれば朝目しまらくたのしみにけり

・咲きながらいさゝか小さし二日三日早くを切りし瓶の櫻は

離　別

短か世にながくもがもと逢ひし子を去らねばならず月も經なくに

出で去ぬとしやう體もなくなげかへば言葉はなしも今日の別れを

床のべてひとりかもねむもの言はぬ妻とそがひにぬるにはまされ

おぼつかな飾磨の海を見に來よと告らしゝ人のなげく思へば

梳る主なきまゝにいく日經し鏡台の上にほこりおきたり

妻が荷をはこびさりたる室内のあかるさにゐてよりどころなし

睦みつゝありとおぼさめしまらくは安からなくに父に告げざらむ

朝にわがたゝむ衾の香にのこる去り行きし子の面わはさぶし

覆水を盆にかへすとあなうるさ昨日も今日も人の訪ひ來る

石楠花

石楠花の花を貰ひし今朝のこゝろ室を清めてすがしくはゐる
ゆく春の山のふかきに咲く花と思ひて見ればかなし石楠花
初めてをわが見る花の石楠花はくれなゐふかくふゝみてゐるも
この夕べ吾を待つ妻はあらなくに早行きて見む石楠花のはな
石楠花の花は置かれて机の上今朝誰にかもたより書くべき

狂藥

盃を地に投げうちて碎かむと今は思はずしたしきものを
含めば美味(うま)し身もほの〳〵と醉へばよし生きながらへて吾酒のまむ
つく〳〵とひとり酌む夜の狂藥に泪ほろりとこぼれけるかも
酒のみてまれにこぼるゝ泪ゆゑ玉の如くにいつくしむなれ
酒のみて泪こぼるゝありがたさ今は素直のわがこゝろかな

ほのぼのと醉へばぞ思ふわかれたるをみな子の上父母のこと

醉ひぬればこの世うれしも短夜を蚤に食はれてわがひとりねむ

いづべにか吾を待つものゝある如し今宵はたのし醉ひて眠らな

醉ひぬれば誰はゞからず大の字にひとりぬるこそたのしくありけり

ひとり寢てひとりさむるぞうら安し今宵は來なそ面影の子も

醉ひざめを呑むべき水の水差を枕におきてぬるがたのしさ

石佛

石佛こゝな野天に立ちぬれて久しく吾を待たせしものか

見てあれば石の佛か母人か世にありがたきおん姿かな

あさましやいとしやさてもあはれやと吾を見そなはす石の佛は

つまされてあはれはふかししみ〴〵と石の佛にものを申すも

道のべの石の佛に手向けむはゆく春の野のしどろなる花

五目並べ

この夜らを五目並べのうつけなさ三度五度わが負けにけり

三三になるがかなしと指先をさら〳〵石にあそばせてゐる

あきらかに人に劣ると思ふとき氣まづき思ひかくしかねつも

つゆの雨ふりやまぬ夜をおく碁石の音の冴えつゝ更けにけらしも

眠りなととづる眼に白と黒石が並ぶよかぎり知られず

生田神社小景

晝ふかみ池のま中の噴泉(ふきあげ)の水こそ光れ身はうつゝなし

おもしろや雀が三羽噴泉のしぶきにぬれておどるを見れば

風の共もろ向く水をよろこびて雀はおどる噴泉をめぐり

池の面にふかく靜もるくれなゐは夾竹桃のはなのかげかも

群雀楠の大樹にさわぐ聲そのもろ聲はよろこべる如

七年勤めし主家を去る

いたづらにすぐせしならね今はわがうら若からず七年を經て
おもほへばながし短しかにかくによくぞ堪へ來しこの七年を

假寓

移り來し家のとなりは朝も宵も女人の聲と三味線の音と
移り來し家は生田の森近みある日は風の音におどろく

古里にて

郷路山

夏山の朝露ふかき楮原ゆきなづみ居ればうぐひすのこゑ
久方の天のま中に立つ吾かはたても知らぬ群山の海
大江山外山に秀でゝ高ければはつ〳〵走る天つ霧かも
見さくれば與謝の入海二つ三つ白帆なびきて池の如見ゆ

立ち枯れの尾の上に身をよせてなくになかれぬさぶしさにゐる
何鳥か聲はするどくなきすぎて山の靜寂はいや身にせまる

山麓なる叔父のみ墓にて

おくつきは松の下かげたてまつる秋をまだきの桔梗のはな
露ながら花を手向けておぼろ〳〵今は消ゆがの面影の人
松の幹西日にあかく並み立ちて今を限りとつく〳〵しなく

獨立開業　九月十二日

いく年かわが待ちたらむよき日今日空はさやかに晴れ渡りたり
今日故に人の謗りも身の恥も忘れてぞ來しよくぞわが來し
新しきわが世を創むわれとわが誓ひしことの今日むくはれて
このわれをかばひ給ひし人のありて今日となりしを忘るべくなし
身の程を知りて堪へ來しこし方よ今日のよろこび誰に告ぐべき

○

一日の生計を終へて夜をふかみ眠たさこらへ錢をかぞふる

かゝる時こほろぎなけば秋の夜のうれしさにゐてひとり酌む酒

古銅の花瓶を貰ふ

花瓶のさびをうれしみ白菊を挿さなと思ひて日をいく日經し

すこやかに秋をはたらく身にうれし朝戸出の空に飛行機とべり

大正九年

別れ

なぐさもる言葉は知らず堪へゐつゝなるがまゝぞと言ひて安からず

天雲の遠く別るゝ今をかもあまたは言はず夜の停車場に

いく年の後の日にかも相逢はむおもひふかめておもわを目守る

人に知らえぬ涙をもちてゆくものか汽車の尾燈を見ればかなしも

かにかくと一生(ひとよ)の行は安からず命いたはり堪へつゝをゆかな

水越峠

ふる里の水越峠こえてゆく今朝ふく風は秋の朝かぜ

朝風にそよぐを見れば峠みちあたり一面萩の花ざかり

おのづから傾斜に生ひてうなかぶし茂りをふかく咲きさかる萩

ねもごろに耳をすませばなきよわる虫のもろ聲せゝらぎの音

朝風に萩の白露こぼれては地になく虫の髯をぬらさむ

この山を向ふに越ゆるさぶしさは忘れて見つれ萩の花ざかり

峠みちふかく來つるよ目に遠く草飼ふ牛ののぼり來る見ゆ

大正十年

姙り妻

縫ひ上げて紅の産衣を折りたゝみほの〴〵と何を思へる妻や
さ夜ふけの鏡に向ひまがなしき乳房手握り見て居り妻は

姙らばくるしきものかとゝのはぬ寢息をききて目覺めわが居り
たちまよふ煎藥の香をなげきつゝ夕はひとり酒を酌むかな
まぼろしの面影人に告げやらむ悔しさをもちてこの朝夕を

長女生る、澄子と名づく

如月の月は甍につめたけれ歩みとゞまり心安からず
こはあはれ疑もなく吾が子なり人間の子の聲あげて泣く

いく月をおもひ設けつゝ親となりて理(ことわり)もなくこゝろかなしよ

親と子の縁をもちて逢ひたりし如月の空は澄みわたりたり

浴みさすと生れて七日の子が肌にわが肌ふりて愛しきものを

掌にのせて世にたはやすき命かも現心に子を洗ひ居り

生業につかれはゐつゝ夜をおそく子を膝にのせて酒をくみ居り

子をもちて思へば戀ほし亡き入にかぞへて古りしわが生みの母

澄子病む

片時も下にはいねず母が胸父が膝べにいたくやせたり

抱かれてしげ〳〵と父が顔を見る病む子が眸(まみ)にうつる朝の灯

歸省

古里にわが家はなしと悔しさを心にもちて夕つかれ來し

ありし日のわが家の屋根にかを〳〵となきてさぶしき烏が一羽

閉されし雨戸の板の木目さへつばらに見ればなつかしきもの

たもとほり涙おちたり何やらむ圓頂緇衣の吾かとぞおもふ

かへり來し吾をまつ人はあらなくに昔ながらの向つ尾の松

おくつきに回向申さく來しといへば媼さしぐみ花をたびたり

おくつきに迷悟を知らぬ現身のおもひはろかや松風の音

おくつきは只松風の音ばかりたそがれ早き山の峽かも

大正十一年

獨酌

しめやかに春の雨ふる夜の更けはつくぐひとり酌むべかりけり

次の室に子もその母も寢たるらしほのぐ醉ひてひとりなげくも

世の相かなしといはね相逢ひて別れし人はいくたりならむ

すぎゆきし時はながしと思はなくにおぼろなるかもその面影は

笹百合

吾幼くてこよなくこの花を好めりしかば、ありし日の母はこの頃ともなれば、旅なるわがことを言ひ給ひこの花を挿し給ふが常なりしと

旅鳥遠居る子らはかなしよと母が折らしゝさゝ百合のはな

ほとゝぎす晝をしきなく古里の野山に咲くはさゝ百合の花

ふる里の野山に咲かむ今行きて折らましものをあはれ笹百合

夏草の茂みの中にまがなしくすらりと伸びてさく百合の花

ちりふかき巷に住めば山戀ひし錢をかぞへて買ふ百合の花

仕事了へて今は吾が身と電燈をひくゝともして見る百合の花

うら若く懸想の文を見るこゝろ久しくて百合の花に向へば

悼佐々木杣男氏

ほの〴〵とたつ面影やあまたゝび逢ひしとにあらね忘らえぬ人

偲びつゝ歌の供養を申さくと生けるわが伴今日寄り集ふ

落葉集

久々に弟訪ひ來る麥酒など酌みながら語る

男の子やもうばら刈りそけゆく道の遠ければとてなづさふべしや

人の家に召し使はるゝ少女、この頃うち沈めるは妊れるためなりときけば

袖をもてぬぐふ泪のありやなし口惜しきことをきゝにけらずや

久しく消息なき越後の石田幸平兄に

浴衣きて夕べは寒くなりにけり一年逢はず疎くなりしか

風邪ひきて臥りつゝ思ふまじきを思ひ出でつゝ

こほろぎのなくばかりなるうら若さかへらぬことをうつら〴〵と

秋既に近し

うちならす人を葬りの鉦の音すみてしきこゆ街の秋風

弟より大鰒をおくりこす

父上よ早やかへらせとわが妻はうまし鰒を味噌に漬けてまつ

佐藤茂夫兄今一度逢はむと約したるまゝ歸國、消息なし

淑き人のけだしや待ちてゐしならむ一筆われに書くを忘れし

血　緣

久しく消息不明なりし次弟危篤の報突然伊勢より來る

血緣はかなしきかもと心いそぎ伊勢の國べに夜をこめて來し

疲れ來てこの夜の宿の夕飯をひもじくはゐつたふべがたしも

來て見ればおもひ設けたるあはれさよこの病院の庭の落葉や

露霜の今は消ゆがに病み細り面をそむけぬ泣きてあるらし

大正十二年

歸省

二月六日雪ふかき古里を訪ふ、幼きより他郷に出で歸省すること十度に餘れど、かつてたのしき心をもちて來しことなきをおもひつゝ、小阪峠にて

疲れつゝわが越えなづむ峠みち只かう〳〵と雪の松風

山の池のほとりをすぎ村の娘の妊れるを恥ぢて投身せる話をきゝて

思ひ呆け生れね胎兒の泣き聲をきゝて冷めたくなりはてにけむ

一つ松雪をかゝぶり池の面に影を沈めてたつがあはれさ

晩秋のうそ寒き日暮なりき、病重き母を吊臺にのせこの頂きに杖を入れし時、母は吾に寒からずや弟はうす着ならずやなど言ひ給ひし

銷魂のわれのおもひやふる雪に埋れて在す石の佛は

三十年の昔愚庵和尚もこの峠を越え給ひし

あなあはれ愚庵がこゝろわがこゝろ眼路のかぎりは白雪の山

勞働

汗あえてわが挽きなづめ荷車の大地にひゞく音のよろしさ

湧き出づる汗ふきあえず身の上を思ひ合すや晝顔のはな

美しき朝やけ空やいゆき逢ふ人はしたしき日稼の人

雨ふれば

さびゝとふる雨をきゝ常ならず五體伸して晝をねて居り

稅吏

いさゝかは心たかぶり古の憶良が歌をなつかしむかな

青蚊帳

きりぐすなかばと思ひ青蚊帳にさし入る月を見て居りにけり

妹の嬰兒死す

柩には乳と玩具をとり添へて泣きくづをるゝ父と母とは

この世には親を泣かせに來しものか短命の子がこの死相はや

秋　來　る

すゐ〳〵と蜻蛉ながれてゐる空や街も塲末は秋の風吹く

讐ふれば西瓜をさくと切るこゝろあなすが〳〵し今朝の秋風

何しかも妻子をもてる身がかなし秋の霞のたなびく見れば

掛け古りし鐵舟が軸しみ〴〵と今宵見てをりよみがてぬ字を

酒　友

世の相今は悲しと常ならず福田順平醉ひてなげくも

ほのかだに醉へば即ち紅燈の女人戀ほしむ名倉知正

うら若く桐田倉次は父となりて泣く子をあはれ醉ひてあやすよ

暴飲遂に腸出血となる

この日頃親しむものは狂樂の盃ならず衰へにけり

現し世にあらむ命のいく年を酒にかへむは惜しと思へど

臥りつゝあはれ外の面の泣き聲は吾子ならずやと耳をすますも

わびしさや日の暮れ方をわがひとり粥すゝりつゝ生計を思ふ

やめよとは言はねど酒に身をやぶる事なかれよと逢ふ人の言ふ

長男生る　良一と名づく　十二月二十三日

しらきぬに眞玉をつゝみかい抱く産屋の妻が面やせあはれ

年の瀬にいまだ名づけぬ子を抱きてこの世の事を今はなげかず

大正十三年

東海道車中

駿河の國とおもひて目覺めをり闇の奥所に灯が一つ見ゆ

甦る面影をなげきぬば玉の闇夜によぎる人のふるさと

ながらへて今はかたみに子の親や闇にながるゝ灯のさびしもよ

はかなきおもひをもちてこの宿に一夜やどらむいとまはなしも

酌む酒にさびしがりつゝ醉ひたればあな笑止やと涙落ちたり

わが汽車は富士を遠ぞき來しなべに家なる子らが名を呼びにけり

桃山愚庵にて

在りの世に悟道の人もわびしとやきゝ給ひけむこの庭の雨

轉業

住みなれし神戸より大阪に移る

須臾にして來べしと思へ知る人とおのづから疎くなりゆかむもの

生國をもたぬこの子は父母と電車にゐるをよろこぶあはれ

八百屋

おのづからこゝろさもしくなるものか八百屋となりて月は經につゝ

朝は未明に起き出でゝ門など掃き清め一杯の冷酒を呷りて賞出しにいゞ

淀の瀨の川霧ふかき朝闇を醉ひてしゆけば現そ身ならず

人參は大根とならびわが店の夕べは秋が身にしみるもの

霜の朝車の手木のつめたさも慣れてはしたしわれの世すぎも

世は師走子らが春着の一枚を妻とよろこぶ貧しさもよし

大正十四年

○

如月の夜風はさむしかい抱く子を庇ひつゝ道ゆき疲る

ふる雪は闇の空より湧く如しこの世も人もみなあはれなり

筍のとなりに置くは獨活と蕗今年の春もとゝのひにけり

すこやかにして貧しければかめぐり來し春を春としつくゞとおもふ

石楠花

逝く春を惜しむとならねよるべなきおもひにふるゝ石楠花のはな

福知山なる足立國手に捧ぐ

父がためたばりし藥おし頂き心かなしく吾なりにけり

大正十五年

朝の合掌

あかときはいまだを暗しひむがしに向きて額たれ合掌すわれは

あかときのやみを吹き來る秋の風身にしみて思ふことのかなしさ

有明の月

有明の月の照れゝば凍土の長手一すぢ遠じろく見ゆ

良一

浴みして吾子が裸形や見るところゐしきも股も玉の如しも

榮壽信吉兄によす

これの世の縁にふりてなすことのよきとあしきと吾が言ひかぬる

朝月

魚市場どよみの中にわが仰ぐ空にすみたり朝月のかげ

朝月を見つゝしあれば湧く涙人に知らえず魚買ふ吾は

裾野原

如月や富士の裾野は夕まけて氷雨にけぶる杉の群立

裾野原淙々として行く水のつひにさぶしと誰に告ぐべき

二男生る　昇二と名づく　三月二十三日

産聲の朗らかにして高ければ思ひまけたる男の子とぞ思ふ

幼きが唐紙ちかく面よせてうぶ聲きくと立ちてゐるを叱る

この朝産屋の妻がなぐさにとさすは菜の花白梅のはな

春雜詠

何やらむ忘れてゐしが今朝となり淀の川原のこの別れ霜

いとまなき父が渡世を幼きがかこつをきけば世は春べなり
何やらむ今朝はたのしと思へればいとけなき日の想出にゐし

淀　川

淀の瀬のさ霧うすれついざり舟相向ひゐて叉手張るが見ゆ

夾　竹　桃

踏切に汽車を待ちゐる日盛りや夾竹桃のはなのけうとさ

秋　ふ　か　し

この家の賣られてゆくといふ娘障子のかげに何を笑へる

子　供

悪童に交じりて吾子のあそべるよ獸の糞に石投げてゐる
わらはべはおのづからなる聲あげてこの世たのしく遊べるらしも

津田武二氏の思ひ出の小文をつゞりて

そかはかとすぎにしことを書きつゞり落葉時雨に耳とめてゐる

中津歡一兄の汽車遭難をきゝて

ぬば玉の夜のふかければ行く汽車に安睡はしつゝありけむものを

歌會のかへさは君と更け沈む元町筋をいくたび歩みし

天皇陛下御大切の報至る

夜の程に天の白雪ふりおきて國土かなしき有明の月

昭和二年

伊勢參宮

神垣の杉生の下びをぐらきに遊べる程の雞は眞白き

朝々をはろにをろがむ大神の御門の前に今ぞ詣でし

しぐるゝや杉の雫にたちぬれてたゞかしこさにわれを忘るゝ

乞ひ祈むと御門の砂にぬかづきて私事はわが思はむや

鳥羽日和山

目路のはて消ゆがに富士の見ゆといふ心かなしく目蔭をするも

冬さびて鳥羽の港は波の色も小島の松もおちつきて見ゆ

潮曇り水平線はおぼろなれ太平洋と見ればはろけき

二見に宿る

しほさゐの渚の宿の朝窓に松葉吹きちる風のさむしも

朝餉はや飯は食さなくはしけやし銚子に添へて蝦のつくり身

家妻の今朝は遠しと朝酒につねたしなまぬ人も醉ひたり

伊勢蝦は鎧兜に身をかため旅の土産と値切られてゐる

生け蝦の七十五文高からね遠き家路に買ふべくもなき

母十三回忌

騷げるは久にして逢ふうつそ身の祖母を知らぬ孫どもぞ母よ
み靈はや孫のまつりと寄り集ふ幼きものを笑みて見まさむ

折々に

このいく年腹の底より聲あげて笑ふといふを忘れたるらし
年を經てつかれしわれや春の夜をせつなき夢に泣きてさめにし

世の中は一天地六賽の目のなるもならぬもすべなかるらし
廢園の櫻折られて枝をなみ言ひわけばかり花をつけたる

澄子就學

先生に自が名呼ばれてはつきりといらへする子ぞうれしかりけり
その親のいづれにも似ず人怖ぢをせぬが安しと妻とかたらふ
のんびりと育てたきもの子の前にさもしきことはきかすまじいぞ

轉業

八百屋やめて古着屋なせば小人の不善をおもふ暇多しも

賣ると買ふ安し高しとうら表繻珍の帶の畫すぎは憂し

まづしけば一つの道は行きがたし思ふまじきはわがなれの果

枚方歌會席上

野路遠くかすめる街のたゝずまひ國は河内ときけばさぶしき

初夏の光まばゆき庭隈におろかさびたる棕梠の木のはな

咲きのこる花をたづねて舞ひうつる蝶も若葉の香に醉へるらし

花かげ

わが心のどかにさびし花かげに歩みつかれし子を座らせて

咲きさかりほろりはらりと散る花を掌にうけて吾子は唄ひ出にけり

古里

來て見ればこれがわが家のあとゞころ桑生が中の夏蕎麥の花

ありし日の背戸の邊の川古里をわが出でしよりいく年か經し

背戸のべの若木の柿のなり初めていくばくもなく家を出でにし

母がみ墓

おくつきは松の平山雨あとの淨らなるかも赤埴の道

この春の地震にゆがみし石の向き直しまいらせて泪おちたり

古里に逢はねばならぬ人もなしはるゞゝと來て石にもの言ふ

○

駒鳥がなくよと思ひ目さむれば生れ在所の山裾の家

雨もよひ檜原杉原霧わきて朝さむけし鷹のなくこゑ

大池は山の入りふかく靜もれり汀におごる野茨のはな

呈不旱堂主人

時ありて噂をすればわがむすめ不旱の小父を忘れて居らず

二合半にうき世かなしくなる酒ぞ久しく酌まぬ君をこそ戀へ

おのづからやわらぎぬらむ子を持ちて筑紫荒男が眼のけはしさも

子を持ちて知りたることもありぬべし尋ねあぐみてゐしことや否や

こほろぎがなきよわる頃よ古着屋は賣れ初むるべし夏は細れる

小學校參觀

書く假名のかたちやうやくとゝのひし子らをし見ればありがたきかも

先生もかなしかるべしくりかへし教へてもなほわきがてぬ子は

先生もたのしかるべし秋さりて子らすこやかにまなぶを見れば

ゆく秋

人の心になにを殘してゆく秋ぞ夜明けの街の霧のつめたさ

久しき友へ消息のはしに

お伽噺の終りまできく子が一人半ばに眠る子が二人あり

初めての普選に人材出でず

おもひまけて久しかりしが筆とりて人の姓名（なまへ）を書くほどの事

茸狩り

むら時雨松にさむけき秋の山茸のありどに吾が子を呼ぶも

松の間に莚をしきて酌み交す吾汝同醉の聲のたのしさ

良一

日もすがらお寺の庭に砂あそび夕べ汚れて吾子のかへり來る

鼻たらし顏も手足も砂まみて妻よ叱るなこの玉の子を

時雨

ひきすゑて叱る心は憎からず窓に時雨はうそさむきもの

昭和三年

折々草

生身の地藏菩薩かわが子ろの寢顏はやすし愛しかるかも

この頃は朝湯に行きて齒を洗ふ快よさなどさびしみながら

氷雨して今宵さむけし早寢せるとなりの門か人の叩ける

小夜床に咳くはどの子ぞ寒風にあそび呆けゐて風邪ひきぬらし

武田尾溫泉

との曇りちり來るほどの淡雪や三十三才なく山川の邊に

更くる夜の枕にひゞく山川の音にぞ思へゆきてかへらぬ

山の湯に一日あそぶと來は來つれくらは思ひは忘れかねつも

山の湯の冬の夕餉はつゝましき酢味噌にたぶる鮒の刺身を

酌むべくは山の常蔭の湯の宿に二人三人が閑かなるべし

恩師を陋居に迎ふ

巷路に古着ひさぎてあり佗ぶる吾を訪はすときくはまことか

あばら屋に請じまつりて茶を一つすゝめまゐらす術もあらぬかも

いわけなくよしなきことをきこえたりとり亂したる吾のかなしさ

霜枯月

たま〳〵をわが店さきに立つ人の嚏(くさめ)をぞする如月のかぜ

大山志男兄東上す、君質蒲柳なり

君をやりて案じてゐるぞ東京の霙ふる夜をから風の日を

臘梅

水仙のすがれたるをばとり捨てし瓶にひらきぬ臘梅のはな

うちさわぐ子供を外に追ひやりてひとりをあれば匂ふ臘梅

ひとりをば好む吾とも思はねど時につくづくとありたかりけり

節分

通り魔の一のくらやみ豆うちて狭き家内を子らのとよもす

既にして四十路に近きわが齢豆をかぞへて子らとおどろく

神棚に灯(ともし)にぎはひこの夕餉とろゝ麥飯鹽鰯かも

霜氣

掌にふりて鞘は臘塗の研ぎもよし柄(つか)の頭(かしら)に龍ぞ怒れる

鞘を走る太刀の焼刃は亂れ打ち霜夜の更けと寒し匂ひも

一年生

書き方を今日は習ひし手も顔も墨のつきたれ一年生は

一年生がうたふをきけば幼くてわれもうたひし紀元節の歌

良一五才小倉服をきて喜ぶ

人のいふ氏も育ちもさもあらばあれ吾子はこの子は珠の如しも

ある時

この悔をいく度吾のくり返す思ひつゝまたしてやられたり

夢

紫の富士をさぶしと見し夢のさめておもへばさらにさぶしき

原眞弓兄福州に轉任の報あり

國遠くひとり住みつゝ朝夕の言葉の數もすくなかるべし

南支那福建省といふことの何かさぶしき思ひぞわがする

支那の國はひろくはろけし南のはたてといはゞ母のなげかむ

怠りてなげきなかけそ船毎にたよりを書きて母にたてまつれ

遠く住めば身の起き臥しを勞はりてさやりあらすな母の愛子ぞ

澄子

何にても買ひ得させむと約したる優等賞を得て迫る

子らがもの足らひ買はまく甚だも貧しきに過ぐる父と知らめや

幼くてさときがよしと思はねど人にきかれて豈わろからず

足立峯枝夫人　丹波より草花の種をおくり給ふ

君が家の納屋にくらべて廣からず九尺の間口庭のあらむや

蒔くべくは素麺箱か物干に芽の萠えたらば子らが摘むべし

漸くにして試驗を終りしと爲房上杉の二子來る

五々の春思ひ待ちたるたのしさはいづべとなげく新學士二人

いざ酌まな何はともあれさぶしさを今宵は言はず醉ひて唄はな

春

曇り空を風にながれてあなあはれ花火の旗の行方知らずも

巷路に菜種の花をさげもちてゆく子を見れば春はかなしき

さぶしさに

さぶしさに箍のゆるびし古桶を力をこめて打ち碎きたり

古桶の漬物桶をうちくだき飯たく料と妻に告げたり

青あたま

今朝の朝泣く〳〵剃りし青あたま二つ並べりくゝり枕に

剃りたての坊主頭のまさやけしつくづく見れば可愛ゆしや吾子

三男生る雄三と名づく　十月一日

生れし子は五體そろへる男の子なり忝けなさに言ふこともなし

量られて一貫目まり百目の子いさましきかもその泣き聲も

母も子もすこやかにして肥立ちよしわが妻をこそよき妻と言はむ

呼びよきがよしといふなり名づくべくわが惑ひつゝ妻にはかれば

今は既に一女三男の子の親かわが甲斐性の覺束なしや

叔母逝き給ふ

去年の夏訪ねしことなど思ひ出でつゝ

よく來つるよくぞ來つると老い呆けてたゞに泪をおとし給へり

遠住めばこれが名殘りぞ見納めぞまさきくあれと泣き給ひにし

秋ふけて草木枯るゝとわが父をさぶしがらせて君のゆかしき

尊族の今は一人なし古里にいよ〳〵うとく吾がなりゆかむ

昭和四年

茶臼山歌會

松の秀に烏なきつゝ竹群の鷺とあそばず風のさむしも

國遠く乙女戀ひつゝ住みわびて歸へり來し君はいまだ若しも

父の命　二月十三日

病み呆けて今は佛かをさな子かいく日保たむ父が命ぞ

ちゝ〳〵と窓の邊にしてなく雀わが父は今は死なむばかりぞ

現つなく今は夜かと問はすなり晝ぞといひて涙おちたり

わが膝を枕となさせ父よ父よ佛の慈悲を忘れ給ふな

わが膝を枕となしてひき給ふいまはの息は大きくありけり

現し世の親子の所緣わが膝に父は佛となり給ひにし

とり縋り泣きくづをるゝをみな子をいましめてわが咽びつゝをり

何事の言ふべくもなし膝の上の佛に申すなみあみだぶつ

おん顏の安きを言ひてむせびつゝよろこび合ふもわが兄と吾と

もう何も言ひ給はざる祖父ぞと子が顏よせておろがましめぬ

葬り道雪のふり來ぬはゝそはを送りまつりし日をさながらに

大和吟行

秋篠寺

目をよせて蔀(しとみ)格子の奥に見るくらきに在すみ佛の顔

遠く來て心いたはり酌む酒を大元明王吾にゆるさせ

平城宮趾

黄の芝生遠世の宮のあとゞころ春日あまねく陽炎ぞもゆ

郡跡村

大和路や麥生のはてはうちかすみ遠代の佛地(ぶつち)雞なくきこゆ

唐招提寺

年ふりしものゝあはれさ美しさ石も瓦も夢の代のもの

鐘さびて柱くちたる鐘樓の屋根に雀がつがへるあはれ

古寺の春は淺けれ池の邊に馬醉木は咲けり白房のはな

京都丸山「あけぼの」にて　四月二十一日

花すぎし櫻にからみそよぎつゝ藤の玉芽はいまだほぐれず

咲きをゝる櫻椿のかたへにし何の裸木ぞおろかさびたる

花すでにすぎし櫻の梢とほく愛宕はかすみ消ゆがにもゐる

席上夫人を失ひ給へる岡本大無氏に寄書すとて

花すでに土にかへりてゆく春を曇りやすからむ君が眼鏡は

平虫人一週忌

ゆく水のゆきとゞまらぬさぶしさよ河内の春もしどろなるべし

偶　成

何事のすぐれたるなし妻子らを飢えしめずして吾は足りむを

顔をなでゝ髯ものびたりこの頃は埃まみれのわが心かな

わが心湧きてあふるゝ何もなし汚れはてしと思ふわりなさ

春日

ちゝのみの父が待たしゝ春の日のうらゝかなれど歸へり來まさぬ

春の日のうらゝかなればいづべゆか歸へり來まさむ父の如しも

在りの世の父が名宛に届きたる見本の新茶いれてまつるも

幼子

幼子はよきとあしきと二分けにわけてをぞ見る人をも物をも

圓珠庵にて　契沖阿闍梨を偲ぶ　七月七日

庭の邊の楸(ひさぎ)の花は實となりてひさしく思ひしみ墓べに來し

おくつきは松と姥目の下かげや風の吹く日はわくら葉が散る

曇り日のざくろの花の赤さはやおちつきかねて茶をのみにけり

勿體なや繪像の前の位牌にし契沖阿闍梨とよめばかなしき

この室に阿闍梨在して机をばこゝのあたりに据え給ひけむ

圓珠庵離室に　花田先生を訪ふ

來て見れば隱れ家さびて先生の部屋はさびしき小机が一つ

かにかくに夜は疲れて眠らせど朝はさすがにわびしく在さむ

連れて來し吾子の眠るに先生の絣の單衣かけて給びたり

入梅

梅雨に入る今日の入り日のゆゝしさよ雲をさし貫く矢の光りはや

竹の里人忌　亀の池にて

秋の風つねにさぶしきわが心糸瓜を挿してつくゞくと居り

たきまつる香の煙は花瓶の刈萱の穂にをみなへの花に

目覺め

目覺むれば夜明けの街を叱られて牛がいくつも牽かれゆくらし

牛ひきが夜明けの街に綱をもて牛叩く音聲あらゝげて

筑摩鍋をよみて

世を荒く渡り來し人の息吹きなり夜寒の秋を讀むべかりけり

子供らは

叱れども幼きどちは相鬪ぐことも一つの遊びなるらし

友に

老い母は世の常の如泪もろし心にかけてものに耽るな

枚方青雲樓にて

松山の松にあまねき日の光りしみ〴〵しもよこほろぎの聲

散る程の櫻もみぢにまつはれる十月盡の日のひかりかも

吹く風はいづれこの世の秋風ぞ酒さへ沈む落葉時雨や

冬來る

幼子のからだは常にあたゝかし添ひ寢したしき冬近づきぬ

昭和五年

父の一週忌

奥津城に花を手向けてふしおがみ思ふは吾の生きてあること
うつそ身のわが身をぞ思ふ奥津城に今日きく聲は去年の松風

み靈はや生ける吾らをみそなはせり今はた何を告げ申すべき

妻

現身の年の緒ながく添ふ妻はいたはるべけれつくづく思へば
十年の破れ世帶に子らを多みかつて不足をわが妻の言はず

夢

三界に家のなしよと訴へし夢のおもわをさめておもふも

ぬば玉の闇の奥所に灯の見えしなつかしさ故心ゆらぐよ
今にして稲妻のごと湧くおもひ二十年近くわがたもち來し

五條の宮

大公孫樹光りみなぎる空さしてゆたかなるかも枝くみ交し

悼加納曉氏

わが歌を完膚なからしめはは〳〵とわらひし君が面影に見ゆ

天滿亀の池

おり〳〵にこぼれ散りつゝ夕ぐれて靜けさふかし藤波の花
咲き垂りて藤の花房ながければ夕べなびかふ風立ちにけり

愛宕山

愛宕山春の遊行とさしなみの隣り人らとうちつれて來し
しみ立てる杉の木立の小暗きにむらがり咲くはあしび白花

山頂より東方を望む

見さくれば霞の奥にはろばろし眉引なして横たはる山

更に西方を望む

かへり行かむ古里はなしたゝなはる山のはたては空か霞か

この頃

叱らでもよきに叱ると妻のいふこの頃とみに子らのうるさく

子

はなはだも短きを子はよろこべり去年の單衣の一つ身をきて

よく喰らひよく遊ぶ子の目に立ちて伸びゆくを妻のおどろきて言ふ

古着屋

あけくれのわがなりはひに世の疲れ人の疲れを見つゝかなしも

何事もその日の風とあきらめて貧しきものは皆あるらしき

島田兵三氏令閨を失はれしに

鉦うちて七日七日のとむらひになほし思ひのあらたまるべし

河内野の五月夜空は暗からむこの世の夢はつねにさぶしき

紫陽花

行き逢ひて人のそらせる目先にはてんまり花のあぢさゐの花

何故に見て見ぬ振りと吾も見しあぢさゐの花は美しきかも

臨南寺

きゝわけてきけばおもしろ臨南寺森のめぐりの蛙の聲は

森ふかくすらりと伸びて若竹のふれみふれずみ椎の老木に

天満亀の池

池の邊の木々のそよぎもたゞならずゆきゝけはしき雲の色かも

かつて見し花は實となり藤棚のかげふかくして風のあつしも

わ が 歌

ひとり言人にきかれし面はゆさ常にぞ思ふわが歌の上

さかしらにわが詠む歌はうつそみの夢のくり言貘ぞ來て喰へ

詠みをきて後誰にかも示さなむ吾がよむ歌は恥づかしき歌

夏 夜

さし迫る金の工面もさもあらばあれ眠りかねつも暑き夜頃を

從弟五郎 北海道に移住、子を死なせしときゝて

釧路の國阿寒ヶ原に幼子を埋めて今は住みつくらしも

秋風はいづべより來と墓のべに立ちては思ふ日もありぬべし

竹の里人忌 香里詠而庵

かゞなべて三十年のへだゝりのありと思へや秋風の吹く

秋山の谷をぞへだて人の聲風にながれて遠ぞきゆくも

折にふれ

巷路に古着ひさぎて恥しつゝ生けるたよりは幼子のゆゑ

幼子を四人はぐくむかなしさに人に不義理もわが重ね居り

鏡

うち向ふ鏡の中に年を經て心いやしくなりし顔が見ゆ

鏡には己れうつりてはなはだも明らさまなれば再びは見ず

白菊

いさゝかは霜の白菊紅さして活けてを見ればたゞつゝましき

おのづから居ずまひ正し白菊を今朝のいとまに見て居りにけり

消息

わが四十路分別もなくいたづらに明日をたのめて過すばかりぞ

君にわがまされるものの一つあり子を四人なして皆すこやけき

隣家は靴店なり

となり人靴底を打つしきりなり壁にひゞくよ夜は冬めきて

寺　庭

歌を詠まむ心がまへもなくなりて散るもみぢ葉に子と遊び居り

深　夜

まがなしき深夜の酒は醉ひ早し絶えたる音に耳立てゝゐる

秋　風

おのづから人の面のけはしさをしみてぞ思ふ今年の秋は

秋風に餓孚ならべるおもひ見つわれも妻子もうちまじるさま

奈良の歌會に行きかねて村井兄におくる

青丹よし奈良の都をいまだ知らず行きて見たしと心はやれど

霜月の月の初めはこの頃の書き入れ時ぞすべなかりけり

昭和六年

吾子

澄子

心ばへわろしと言はねもの言ひて唇うすし女の子さびつゝ

良　一

顔かたちとゝのへる子の心弱く憎氣ざかりを人のにくまぬ

心弱き男の子の末を汝にかけて思ひ至れば吾が身の上ぞ

昇　二

叱れども兄をぞしのぐ面構(つらがま)へくるりとまはるその眼の光り

もの言ひて人の顔色よむ早し油斷も隙もなしもこの子は

發育のことによき子の四肢の張り湯につれゆきて常にたのしき

この子らが兵に徵さるゝ日はいづぞいたはるべけれ吾とわが身を

○

卑しさはいづれ下人の小忰と已れあきらめて育むかなしさ

この中に或はひとり嶌が生む鷹の子もやと育むかなしさ

或人娘の嫁ぐに歌を求めしかば

生涯に泪こぼるゝ芽出度さは今宵ばかりぞ梅の初花

寒牡丹

なげなしの財布はたきてあはれなり寒の牡丹の白きを見れば

勿體なけれど寒の牡丹を買ひにけり妻も叱言は言はざりにけり

この室のまづしき中に白牡丹驕れる見れば何ぞうれしき

わが留守を子らよさわぐな冬ごもり牡丹の花はくづれやすきを

人に

昂ぶりて詠みたる歌を見むよりはわれは番茶の香を賞でゝゐむ

珈琲のうす手の碗の熱くして唇ふりがたき思ひぞわがする

夕空

面影はうすれたりとはおもへども入り日の名殘り見るはかなしき

夕雲にまぎれ消え入る鳥影はあはれいとしきものとこそ思ふ

六甲山の雪

聲あげてあなづかしと雪の山にものを言ひたり久しくて見つ

津の國の山さへ雪のま白なり忘れわがゐし古里の山を

神戸青谷妙光院にて

世の寂びれ出で入る船もしげからず見放くる港かすみたれども

圓珠庵にて　三月八日

人を待つと風炉の炭火もつぎ直し松風の音きゝて久しき

庭木々の植えかへられし衰への見えつゝもとな芽ぶくとはすれ

加藤茂氏祖父五十年忌に歌を徵せらる

繼ぐ家によき子のありてはろけさよ五十年忌の靈祭りかも

五十年槍は長押にふりたれどつぎてさやけしその鋭心は

甲　山

谷邃く松の木の間にもり上り咲ける櫻の花あかりかも

咲きをゝる櫻の枝の素直さも松の間にしてつくゞくと見つ

咲きをゝる櫻の枝に啼き交す小鳥も春をよろこべるらし

ものゝふの甲（かぶと）の山に春たけてさくら縅（をどし）と花咲きにけり

とゝにして春のあはれは盡きたりとなげくに似たり花見人はも

子供

永き日の夕となればつぎ〳〵に腹をすかして子のかへり來る
夕がれひむさぼり喰らふ幼子のうち並ぶ見つゝ何か思はむ

詠而庵　四月十二日

咲き亂る花の下びに湧く聲は何となけれど吾を泣かしむ
うら〳〵と春の日は照り遠山のはてはかすみてまうらかなしも

瀬戸内

曇り夜の波切りすゝむ船の上に思へば久しこの旅ごゝろ
船の上に心うつけて見てを居り曇り月夜の潮の色ふかき
曇り夜の明けづきぬらし早潮の光ふくみて渦卷く見れば
わが船を群れて追ひ來るかもめ鳥海のひろきに見れば悲しも
相寄りてしたしめる如し煙立つ島の聚落(じゅらく)は朝影のみち

茶臼山雲水にて　六月十四日

泰山木の花こそゆらげこゝに來て半日をあそぶことのうれしさ

この頃の疲れはふかし風にそよぐ若葉の色も眼にしみるもの

梅雨曇り色はすぎたれあぢさゐの花のたもてるあかるさを見つ

小竹群を抽んでゝさぶし立枯れの松の老木に蔦のまきたる

白き蝶木立の中よまよひ出でまた舞ひ入りぬふかき晝かも

夜半大雷雨至り、停電久し　七月九日

事あらば父をたよるか子供らの皆起き出でゝわがそばにゐる

この雨を鉢の朝顔物干に泣きてあらむと幼子のいふ

つかれ

よるところ遠きが如しこの頃の疲れおもへば泪ぐましも

妻子らをつゆ憎しとは思はねど己れ疲れて心けはしき

夏畫

汗あえて人のはたらく晝日中うつら〳〵とゐるは苦しき

藤堂氏を芦屋の新居に訪ふ

厨べに犬の仔の聲猫の聲ひそやかにしてにぎはしき家

梅雨の夜を庭のもろ木の葉の雫灯の及ぶところ玉と光れる

ふりつのる雨をし見つゝすべもなし雨もりやせむわぎ家思ほゆ

野球狂時代

世を擧げて躊(すね)かじり共の毬投げに心も空にうつけゐるはや

物堵けて勝つと負くるとさわぎゐる野球時代を憎まざらむや

アッパッパ時代

姫御前のあられもなしとなげかねど覗く湯文字とその太脛は

立臼に蓑をかけたる雅(が)もあらず見る目にかなしアッパッパ服

伊豫遊草　花田先生に隨ひて

道後聚楽館にて

汗あえてわがとめ來れば湯築山松の木の間にわく蟬の聲

庭池は蓮をうえてゆたかなり花のかげをば鯉のよぎれる

遠く來てたのしかりけり逢ふ人の和面を見ればたのしかりけり

この春の一夜の逢ひに忘らえぬ人にまた逢ひてたのしかりけり

寄せ書きすとて大國兄に

二日三日後は逢はむと思へども待ち遠しもよその二日三日

上灘由亜歌會

詠む歌の稚なさもよしすぎはひの漁りの歌田作りの歌

土用雲ゆゝしくわきて伊豫の海つゞく島山かすみたるかも

よる波のさら〳〵思ふこともなく五色の濱に一夜眠りし

長濱へ

海山のあひだあやふき切崖の一すじ道は人に逢はずも
澄み透る潮(うしほ)の中よ海の子はわが自働車に聲あげはやす

大國庫一兄

自働車のとまる即ちより來るはまこと大國庫一なるらし
大國庫一涙垂りつゝ先生に挨拶するを見ればうれしき

白糸瀧

白玉の繭を煮る香をなつかしみ峽(はさま)を來れば山川の音

大洲歌會　席上高山村及壺神山を望む

相寄りて人はゆたかに住むらしき高山腹の家居ともしも
はるゞゝと來つる思ひに見さくれば壺神山に霧立ちわたる

面河溪

あしびきの山の傾斜の麻畠雨にぬれつゝ麻はさぶしき

鳴りとよみ落ちたぎつ瀬の淵となりふかくも澄みて山魚ゐる見ゆ

岩が根の苔にふり行く桟道のあやふき下の青淵の色

ほの暗き原生林の下道はにわかに寒く苔のふかしも

山川の流れさやけみ雨ふれば菅の笠着て山魚つる見ゆ

深山は夏もしぐれて目の前に樅の梢は霧吐きにけり

さし交す枝のしげくして山川の水はよろこべる幼子の如

おちたぎつ水は岩根を噛みさ噛み淵に渦巻きとよみ流るも

芦屋小集

藤堂氏令室は稀に見る麗人なり

つまぐれの花は實となり秋立ちてしづかなる人に面瘦の見ゆ

鼻を病む

わが鼻のつまるつまらぬ時により子もなぐられて近よるとせぬ

鵜を貫ふ

子供には見せてならじと頭斷ち足切りて妻が燒くつぐみかも

古着屋

賣るると來るはた買ふと來るわが店に出で入る人も吾もかなしも

振袖の遠くすたりし小模様を買ふ人のあり毛唐に賣ると

一つ身を四つ身になほすすべもがとなげく人ありこの年の瀬を

女着のその古御召縫ひかへて背呂がどてらと買ふ人のあり

裄丈けの合ふも合はぬも白縞の袷を買ふは朝鮮の伴

己れ着る羽織すらだに買ひかねてなげくをきけば子らが春着と

古着屋がつく〴〵きけば地にみつる身すぎ世すぎをなげく聲かも

地にみちて天にひゞかぬ聲かもと或る日はなげく丈夫さびて
掛けさらす古着の埃うちはらひはらひかねつもあふるゝ涙を

借　金

何故にうち沈めると人の言ふに指を輪になし見せて笑ひぬ
懐にしかと握りてうれしもよ工面のなりしそこばくの金を
この吾に尙金を貸す人のありて拔き差しならずなりゆく如し

岩浪藤尾兄愛兒を失はれたれば

吾さへに幼な佛の旅姿おもへば泣かゆその父母は

竹の里人忌　香里詠而庵

省みて已れ恥しめ悔ゆるなる大人が忌日はまためぐり來し

神戸筒井八幡

かしこしや齋庭の禁と札立てゝ犬の尿(ゆまり)をいましめてあり

拜殿に米の俵と菰冠り見ればふくるゝ腹ならめやも

師走

今にして泣けどわめけどすべもなし世をあげて吹く風の寒きに

朝床にを指かゞなべ春を待つ幼子故におびゆる父は

○

欠伸して涙たまりしわびしさに似るとや言はむ身は四十路なる

昭和七年

香里友呂岐神社

そこばくの落葉を焚きし跡のあり松風さむし友呂岐の宮

狛犬も耳をかたむけきくものか音のさやゝ松風のこゑ

妻

ととさらに鳴らすが如しからころと米櫃の底をからころと妻は
目に立ちて子らの伸びゆきこの頃は米櫃の底をはたく早しも
世に慣れて聲わらひつゝある時は米屋に拂ひ待たしむる妻は

大阪市教育會館にて　二月二十一日

この室の廣き寒さに友を待ち疊の數をよみつゝぞゐる

春いまだとゝのはぬ空のうち曇り昨日も今日も心さぶしき
裸木の角ぐむ春と埃うく窓の硝子をあらふ雨もがも

鐵兜

せがまれて吾が負けにけり鐵兜きせてを見ればたゞに笑ましき
軍遊び路上に伏して鐵兜服のよごれを叱られてゐる
鐵兜きてはなか〳〵泣かぬもの脛のすり傷砂つけておけ

舊友

老けたるをかたみに言ひてつくり身の山葵に泣きてうれしき酒かな

堅石も醉人避くと打ちふるや君が杖には野良犬の逃ぐ

子供

五月蠅なす騷ぐ子供とある時は憶良を言ひて敢て叱らず

子供らの騷ぐもよけれ壁一重子なき隣りに氣をかねもする

契沖阿闍梨二百三十年忌　圓珠庵にて

この室に今をる吾のくだらなさあはれ〳〵遠き君を思へば

犬養首相遭難　三月十四日

今日の日に生れ合ひたる身の程をなげくもあれど吾は憤りぬ

金

臥しておもひ起ちて思ふは金のことわれの生活に足らぬ金のこと

病床

父の眼を見よと言はれてたちまちに見はるつぶら目涙わきたり

叱るとにあらねど病めばもの言ひて幼子にさへしみ〴〵とする

枕邊にかしこまりゐる子の膝のかなしくなりて立たしめにけり

朝顔の鉢植を貰ふ

色ふかく紅と紫咲きつぎて朝目にうれし人のたまもの

花田先生を送る　六月十二日

先生に逢はなと思ふたちまちに行きし香里はわが忘らえず

友呂岐の香里の丘の一つ松忘れ給はずかへり來まさね

山崎氏邸にて

黄にうれし枇杷のつぶら實鏡葉の中にひそけき籠の花かも

ふるとなき雨に濡れつゝつやゝけく樟の若葉のあたらしさはや